



TITLE:

挨拶

AUTHOR(S):

西田, 龍雄

CITATION:

西田, 龍雄. 挨拶. 静脩 1986, 23(1): 1-2

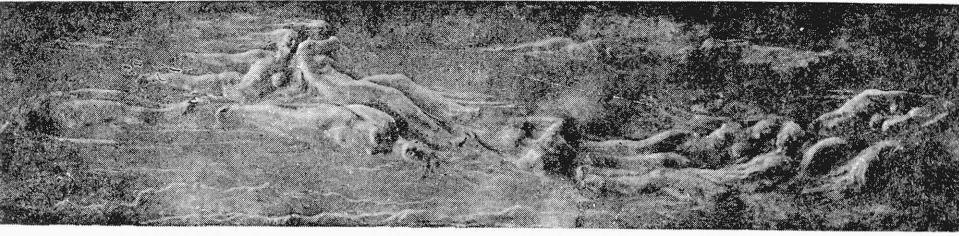
ISSUE DATE:

1986-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36961>

RIGHT:



静脩

1986年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 23, No. 1

挨拶

附属図書館長 西田 龍雄

この四月一日から、私は思いがけなくも、附属図書館長に選ばれました。身に余る光栄ですが、何にしろ図書館の管理運営には、これまで経験がありませんので、よろしくご支援の程お願いいたします。

大学図書館の使命について、前館長の西原先生が『静脩』の中で、堂々と論じておられます。私はまだ到底その水準まで考えが及ばず、当分は私の能力の範囲内で、責務を果たすことでお許しいただきたく思います。

ごく一般常識的に見れば、古い文化遺産を記録する豊富な書籍の保存と整理、そしてそれらの効率的な活用を通じて、新しい文化の創造に貢献する場が図書館と言えます。教育・研究活動に対する支援機構である大学図書館でも、この基本性格は同じで、伝承した書籍を安全に保存管理し、有効的に利用者の便をはかり、新しい思考の醸成に導き得る環境を作る、大学図書館の責務もそこにあると思えます。

利用者にとって、附属図書館と言えやはり閲覧室でゆっくりと本を読み、思索にふける場というイメージが今も強いものです。つまり現状の学習の上にたって、新しい創造へと飛躍する場としての図書館であります。この基本点も、今後とも変

ることがないと思いますが、どんどん変っていくのは利用者が、新しい創造のために、如何に迅速に、そして正確に、また網羅的にあるいは効率のよい選択のもとに、既存の情報を獲得できるか、その手段にあります。最近の電算機導入による情報提供は、その要求にこたえる顕著な技術革新であったわけですが、将来、それをさらに上廻る新手段がどのように開拓されていくか、予測が付きません。

また図書の所在検索が、本学図書館蔵書に限らず、全国的なスケールにおいて可能になるめどがついていることも、大きな進展であります。本図書館は、昨年六月に学術情報センター（当時、文献情報センター）と接続テストを完了し、七月から教育モードの運用を、そして本年三月から業務モードによる運用を開始したことは、今後の発展への確かな約束と言えます。しかし現状では、まだ件数が限定されているのは、止むを得ないでしょう。

古い蔵書目録の遡及入力のための簡便な手段が早速に解決されれば、学内における LAN 情報ネットワークの完成と相俟って、近い将来、本学蔵書 445 万冊のみならず、全国各大学の蔵書の所在情報を、各研究室の端末機を通して、簡単に検索

できる日がやってくるに違いありません。

学内の情報通信組織は、ここ数年の中に、急速に開発されることでしょう。そして大型計算機センターと共に附属図書館の役割は、ますます増大することと思います。しかし、私はその点で図書館があまり先走りしてはならないと考えています。欲ばり図書館であってはならない。図書館は、すくなくとも図書および将来それに替るものの所在情報とそれに関連する事柄の提供には絶対に責任をもつべきですが、それ以上の学術情報通信には、図書館は積極的な協力をおしむべきではないけれども、それは専門機関にまかせるべきであろうと、今は考えています。

一方で、カバーのついた有用な目録も、従来通り必要であることは、言うまでもありません。本学所蔵の学術雑誌総合目録・和文編が、程なく本館から刊行される予定であります。中文関係が収録されていないのが大へん残念ですが、教官各位の研究活動に役立ててもらえることを期待しています。

次々と刊行される書籍を、図書館は予算の許す範囲内で購入しなければなりません。そのためには当然良書の選択が必要であります。特色のある選書方針を軌道にのせねばなりません。

この四月までに、図書館商議員を中心とした委員会はすべて解散されていて、選書については、館内に選書委員会が設立され図書館員が選書する方針になっていました。図書館自体、その内部組織が自から取捨選択にあたるのは原則ではあるけれども、大学図書館においては、学内の各分野の研究者に、専門領域だけではなく幅広い領域にわたってご意見をいただき良書を選ぶのが必要な順路であろうと考えます。この七月から、まだ委員会にはなっていませんが、各学部の商議員の先生方の参加ご協力を得て、新しい選書組織が活動を

はじめました。

古籍、善本の収集保存も、また言うまでもなく図書館の中心的な活動の一つであります。幸い本附属図書館には、内外に誇り得るすばらしい貴重書庫が設けられています。しかし、そこに収めるべき善本、貴重本をどのような基準で指定していくかは、むづかしい問題です。従来一応の基準がたてられていましたが、今回新しい基準を検討する「貴重書専門委員会」も、主に人文系の先生方のご協力によって、この七月に発足しました。

大勢の図書館職員の中には、書物に対して、とくに本学の所蔵図書について豊富な知識をもった方々がいることを知っています。その人たちは、いわば図書館の生き字引であります。一方において、電算化処理の徹底、つまり機器との問答で、解答を得られる方向とともに、他方で、学生諸氏の口頭による質問に、きめ細かい情報を口頭で提供できる生き字引のような図書館職員がいることは大へんすばらしいことと思います。私は生き字引の増加を、心から期待しています。そこにまた得難い伝統的な人間的交流が生きのびていくのです。

うかつにも、私は最近まで、いわゆる Japan MARC を Japan MARK とばかり思っていました。MARC が Machine Readable Catalog の略であることに、かなりたってから気付きました。

MARC は、中国では「機読目録」と言っています。日本語では普通「機械可読目録」と訳されており、ほかに適訳があるかも知れませんが、同じく「機読目録」あるいは「器読目録」ぐらいが、簡単に適当な用語ではないかと思います。

せいぜい「図書館にホン、館長うかつで留守がいい」とならないよう心掛け、図書館運営の責を果したく考えておりますのでよろしく願いいたします。（北京にて）